

『貴公子アルファと桜のオメガ』

著：弓月あや

ill：明神 翼

結局おいしい夕食をごちそうになり、食後のデザートとコーヒーを出された席で、朔実は一いつの提案を試みる。

「家で入力作業の仕事をしています。受けている仕事は全て終わっていますが、また新しい仕事があるかもしれません。確認したいので一度、家に帰ってもいいですか」

唐突に切り出すと、ジュードと給仕していたリントンがキョトンとした顔をしていた。

「仕事？」

「はい。やっと貰えた、大切な仕事です」

今までにない深刻な顔の朔実に、ジュードは戸惑った様子だった。

「どうしても、戻らなくてはなりませんか？」

「外に出て働いたことはないけど、受けた仕事は、やり遂げないとダメだって、おじいちゃんに口すっぱく言われて育ちました。それに就職できなくて困っていた時に、声をかけてくれた方からの仕事なので、大切にしたいんです」

「あなたは当家の客人であり、私の番です。働かなくてもいいと思いませんか？」

「思いません。番って言っても確定したわけじゃないし、もしかしたらジュードが他で、お嫁さんをもらう可能性だってありますよね。そうしたら、ぼくは無職です」

「私は番のほかに、誰かを娶るなんて考えたこともありません」

「でも、番の間柄なんて、ぼくはわからないから」

こんなことを朔実が言い出すとは、予想もしていなかったらしい。どうしたものかと考えていたジュードは、そばにいたリントンに声をかける。

「彼の自宅に行って仕事の依頼が来っていないか、確認してくれ。それと、仕事に必要なものは何か訊いて、持ってきてくれないか」

「かしこまりました。それでは朔実さま。お食事が終わられましたら、どのようなものがお必要か、お教えてください。お宅にお邪魔させていただきます」

それを聞いて朔実の顔が、パアッと輝いた。

「本当ですか。助かります」

本当は自分が帰らせてもらうのが一番なのだが、ジュードにはなぜか、その気がないようだ。そのためにリントンの手を煩わせてしまって、申し訳ない気持ちになったが、もし仕事があるのなら、ここで作業できる。

それ以外にも、自分にできる仕事はないだろうか。

「あの一、入力の仕事だけじゃ手が空くので、他に何かできることはありませんか」

それを聞くとジュードは食事する手を止めて、朔実を見つめた。

「あなたは当家のお客人です。仕事など必要ありません」

「でも、時間がもったいないです。ぼく、これでも力仕事もできますよ」

「そんな細腕に頼む仕事などありません」

何ともつれない返事に、朔実はムーっとする。それを見ながら、ジュードはナプキンで口元を拭い、朔実を見据えた。

「あなたは華奢で繊細そうで、守ってあげたくなる風情だ。だが、口を開けば頑固すぎる」

「あ。頑固って、よく言われます。ぼくは、そんなことはないと思いますが」

「自覚がない頑固さんですか。当家に使用人が少ないのは、私が彼らの相手をするのが面倒だからです。別に金銭の問題で、少ない人数を働かせているわけじゃない」

「ですから、ぼくも気まぐれから手伝いたいと言っているわけじゃなくて。手が空いているから、何かできる仕事が欲しいんです」

双方ぜったいに、譲らない。

部屋の端で控えていたリントンが、困ったような顔をしている。だが、それも二人の目には入らなかった。しばらく考えていたジュードだったが、「ああ」と呟く。

「手仕事ではないが、ひとつ作業を頼みたいのですが」

「はいっ、なんでもやります！」

彼は形のいい眉を、片方だけ上げてみせる。なんとも色気のある表情だ。

(え？ 色気？ 色気って、ぼく何を考えてるの)

自分の考えたことが恥ずかしくて、思わず頬が赤らんだ。だがジュードには気づかれていないようだった。

「この敷地の中に建つ古い屋敷。あそこの清掃と修理をやれますか？ もう何年も人が出入りしていない、とんでもなく古い屋敷です」

脅すような、低い声で言われた。だが、朔実の瞳はキラキラ輝いてしまった。

「とにかく老朽化がひどくて、虫もネズミもいるでしょう。業者以外は入れない場所です」

さらに言い募られて、胸のドキドキが止まらない。

(とんでもなく古い屋敷！)

(すごい。そういう廃屋で一度、大工仕事してみたかった！)

(わー、胸がドキドキしてきた！)

だが朔実が答える前に、給仕をしていたリントンが割って入る。

「恐れながら若さま。あの屋敷の中は腐敗が進んでおります。素人が入れる場所ではありません。危険です」

「もちろん、わかっている。冗談だ。彼には書庫の整理でも」

「ぼく、やれます！」

即答した朔実を、リントンとジュードは驚いた顔をして見つめた。

「朔実さま。今のは若さまのご冗談でございます。あんな危険な場所は専門の、訓練を積んだ職人でなければ入れません」

「大丈夫、やれます！」

あくまでも譲らない朔実に、ジュードは首を振った。

「今のは、冗談というか世間話です。屋敷といっても古くて汚い。十年以上も人が入っていない。汚いを通り越して危険な状態だし、ネズミがいるのは本当です」

「ぼくの住んでいるアパートメントも古いから、けっこうネズミが走ります」

次元の違う言い返しをされて、ジュードとリントンは絶句してしまう。

「そういう問題ではありません。あなたは祖父の、大事な客人だ。ケガをさせるわけにはいかない。つまらない冗談を言いました。謝ります」

突然の謝罪に驚いていると、さらに頭を下げられた。

「ぼく、本当に大丈夫ですから」

「ダメです」

「作業してみて、やっぱり無理そうなら諦めます。それでもダメですか」

思わず上目遣いでジュードを見ると、彼の眉間のシワは深まってしまった。

「お願いします。見るだけ見させてくれませんか？」

朔実は頑として、譲ろうとしない。この頑固さは英国人に共通するものだが、ジュードはお手上げになったのか天を仰いでいる。

彼はしばらく無言だったが、ようやく顔を上げた。

「———本当に、無理はせず、すぐに戻ってくると約束できますか」

「もちろんです」

どっちもどっち。意地っ張り。

そもそもジュードが古屋敷の掃除を切り出した。だが、それは幽霊屋敷のように荒れ果てている物件らしい。それなのに朔実が興味を示すと、心配になるらしい。

揚げ句の果てには、危険だ止めてくださいと言い出す始末だ。

そんな彼の横顔を見ていると、不思議な気持ちになる。

(ジュードって、どんな人なんだろう)

「ぼく、廃品回収のバイトもしたことがあるし、廃屋とかゴミ捨ては慣れています！」

朔実はそう請け負うと、ガッツポーズをしてみせる。だが痩せた細い腕だったので、逞しさはなく、不安を煽るだけだ。

ジュードが心配そうに眉を顰めている。

「私が廃屋のことを持ち出したのは、無茶なことを言えば、あなたが大人しくしてくれると思ったからです。……参ったな」

「それって意地悪じゃなくて？」

「そんなわけないでしょう。あなたが心配だからです」

大真面目な顔で言われて、邪推した自分が恥ずかしくなった。

(こんなに心配してくれるなんて、どういう気持ちからなのかな)

祖父同士が決めた番だから？ 女の子と勘違いして、悪かったと思っているから？ それとも。———それとも。

ジュードは自分のことを、本気で番だと思ってくれている。では自分は？

自分はこの人に、何を感じているのだろう。

番。おじいちゃんの知り合いのお孫さん。いや違う。そうじゃなくてもっと。

(もっと？ もっと、なんだろう？)

自分の番という人のことを深く考えた瞬間。

身体の奥が鈍く疼いた。鼓動が速くなり、指先が震えてくる。ふわっと甘い香りが過ったが、すぐにそれどころではなくなった。

震え出した朔実を不審に思ったのか、声がかげられる。

「どうしました？」

声が出ない。息が苦しい。甘ったるい匂いに咽そうになる。肌が熱い。

どんどん苦しくなって立っていられず、ジュードにしがみついた。その手が小刻みに震えている。病気だろうか。病気。ちがう。これは。

これは。

「ヒートか」

ハッキリした声が耳に届く。だけど意味がわからなくて、ただ目の前の人に抱き着き、身体を擦りつけた。熱い。熱い。熱い。

「あなたにヒートが来た。これが覚醒の、麝香の匂いだ」

興奮を抑えきれないような声で熱く囁かれ、頭の奥がジンジン痺れた。

ヒート。発情。覚醒。衝動。情欲。

いろいろな感情が身体をぐるぐる回る。どうしたらいいのか、もうわからない。麝香の甘ったるい香りが部屋の中に満ちた。

頭が変になりそうな、淫蕩な匂い。熱帯の花の匂いって、こんな感じなのだろうか、場違いな考えが脳裡を過る。

「すごい香りだな。頭の芯が痺れそうな濃厚さだ」

興奮した声が聞こえたけれど、どうしていいのかわからない。

種が欲しい。

唐突に過った感情は、あっという間に理性を凌駕する。

男の熱い種が欲しい。

今すぐ。今すぐに身体の奥に叩き込んで。早く種でいっぱいにして。

「ジュード、ジュード」

「苦しいですか。大丈夫、すぐ楽に」

「種。……種、を、ちょおだいいい……」

自分のものとは思えない、低くて媚びた、絡みつくような声が聞こえる。ジュードの身体が強張ったのがわかった。

「ジュード……、はやく、種……っ」

「わかりました。今すぐあげますよ。だが、少しだけ待って」

そう言うと彼は部屋に設置されている電話で、話し始めた。どこかへかけている。断片的に聞

こえるのは、とても冷静な声だ。

「朔実がヒートが来た」

「私が呼ぶまで、部屋には誰も近づけないように」

「すべての予定はキャンセルしてくれ」

「おじいさまに、すぐ知らせて。朔実がヒートを迎えた」と

それだけ言うと電話を切り、こちらに向き直る。

「待たせたね、私の花嫁。さあ、行こう」

がくがく震えている身体を支えてもらいながら部屋を出ると、階段を上ると廊下のいちばん奥にある扉を開く。そこは大きなベッドが置かれた寝室だった。

彼は扉を閉めると、朔実を改めて抱きしめた。

「朔実、……ああ、私の朔実。私の運命の番。あなたを私だけのものにするよ」

その囁きを聞いているだけで、身体が焦げつきそうになる。たまらず首に抱き着くと、何度も頬にキスをされる。

番。番だ。ぼくのアルファ。

さあ、たくさん種をもらおう。

熱くて濃い種を、たっぷりと。

普段の朔実ならば、およそ考えもつかない卑猥な単語が、ぐるぐる回る。

でも今は恥ずかしいどころではない。頭の中は早く種を注いで欲しくて、それしか考えられなかった。

これがヒート。

抗うことができない、オメガの宿命。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>